

業務用米販売が鈍化

集荷増と併せ在庫増要注意

農林省はこのほど、米穀販売事業者（年間仕入れ5万t以上）による精米販売数量の月次推移を発表した。スーパーなど小売業者向けは前年同月と比べて7～8月の減少から9月に持ち直す傾向がみられるが、中食・外食事業者向けは前年比で1割近い減少が続いていることが分かる（下表①参照）。

① 米穀販売事業者の精米販売数量（前年比）

	7月	8月	9月
小売向け	93.9%	84.4%	99.0%
※令和元年比	(96.8%)	(89.2%)	(85.5%)
中食・外食向け	93.4%	91.0%	93.6%
※令和元年比	(90.2%)	(88.3%)	(91.5%)
販売計	93.6%	87.4%	96.4%
※令和元年比	(93.8%)	(88.8%)	(88.2%)

(注)①調査対象は、年間玄米仕入数量5万t以上の販売事業者（年間取扱数量約160万t）。②調査対象者が販売している精米の全体の数量・価格の動向を指数化したもの。

業務用米の取り扱いが多い消費地のコメ卸によると、「これまで量販店頭の動きが悪くても、業務用の動きはあまり影響を受けてこなかったが、このところは業務用も動きが止まっている」という。その背景について同卸は、「米価高騰を受けて実需者が商品設計（＝量目・盛り付け量など）を変えてきている。さらに加えて商品単価を引き上げており、中食を含めた業務用米の使用量は前年同期を超える月がなくなってきている」と指摘している。

また、別の消費地卸によれば、「業務用では、令和5年産から6年産への切り替え時に米価高騰の影響で（納入価格の）値上げに伴って今年1～2月に実需者がメニューを変更している。このため卸からの納入数量は前年比で100%を超えることがなくなり、悪い例では前年比90%、良い例でも98%ほど」という。さらに同卸は、「総菜コーナーの弁当でも、麺類が増えている。店頭でコメの動きは悪いが、麺類は2ケタで増えていると聞く」と指摘する。

農林省は同日、民間コメ在庫の推移も発表している。今年7月から9月にかけて全農・経済連など出荷段階では59万tから143万tに増加した。コメ卸など販売段階では32万tから53万tに増加。出荷段階と販売段階の合計では91万tから196万tに増加した。前年同月比では、7月から

9月に9万トン増から47万トン増に膨らんでいることが分かる（下表②参照）。

② 民間コメ在庫の推移（万t）

	7月	8月	9月
出荷段階	59	50	143
7年産	0	10	116
6年産	56	40	26
未検	3	0	1
対前年差	+2	+6	+30
販売段階	32	33	53
7年産	0	5	29
6年産	26	22	18
未検	6	6	6
対前年差	+8	+12	+17
出荷+販売段階	91	83	196
7年産	0	15	145
6年産	82	62	44
未検	9	6	7
対前年差	+9	+18	+47

(注) ①水稻うるち粉・玄米（醸造用玄米含む）の月末在庫（玄米換算）

②「出荷段階」は、全農・経済連・県農協・出荷組合（年間5千t以上）と集荷業者（年間5百t以上）

③「販売段階」は、米穀販売事業者（年間4千t以上）③「未検」は本紙試算

④政府備蓄米の在庫（7月5.3万t、8月1.8万t、9月1.0万t）を含む。

民間在庫が増加している主な理由について農水省は、「7年産米の集荷数量が前年を上回った」と説明している。ただし家庭用向け販売のもとつきに加え、業務用米の使用量の減少、さらに6年産古米・備蓄米・外国産米から国産7年産への切り替え時期が遅れる事態が想定される。民間在庫の積み上げ状況には注意が必要だ。